# 『ゴーラクナート語録』研究—序

橋　本　泰　元

## はじめに

本稿は、筆者の長年の研究領域である北インド中世民衆思想において、つねに、その基盤を形成したと言及され、また、そのような定説にもなっているゴーラクナート (Gorakhanātha < Gorakṣānātha) の、ヒンディー語の古形による作品と見なされている文献 (Bānī < Vāṇī) の思想研究の緒をなすものである。

ゴーラクナートないしナート派のサンスクリット文献研究については、その優れた文献史研究が、近年、コレージュ・ド・フランス付置インド学研究所所属のクリスチャン・ブイ氏のモノグラフ『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』(Christian Bouy, *Les Nātha-yogin et les Upaniṣads,* Collègede France Publications de l'Institut de Civilisation Indienne,Fascicule 62, Paris:Diffusin de Boccard, 1994) として公刊され、筆者はその全訳を行い、研究の便宜を図った[1]。

この全訳においては、当然ながら本稿の対象である古ヒンディー語による語録『ゴーラク語録』(*Gorakha-Bānī*) は言及されているのみで、詳述はされていない。しかしながら、インド中世における民衆思想の形成にあたって、ゴーラクナートの果たした極めて大きな役割は、やはり、本稿で扱う語録に示された部分によって知られるべきことは言を俟たないであろう。

本稿は、ゴーラクナートの語録の初めての文献学的研究であるピーターンバルダット・バルトワール (Pītāṃbaradatta Baṛathvāla) 編纂・解説 *Gorakha-Bānī*, Prayāga:Hīndī Sāhitya Sammelana, 2017 (=1960, tritīya

[1]「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』」〈『東洋学研究』別冊（「東洋思想における心身観」）2003 年〉、〈『東洋学研究』41、2004 年〉、〈『東洋学研究』42、2005 年〉、〈『東洋学研究』43、2006 年〉

saṃskaraṇa)[prathama saṃskaraṇa 1942] の解説（主要部分）の和訳、そして原著者による校訂文の提示と、原著者による現代ヒンディー語訳を参考にした筆者の和訳からなる。

原著者の解説を提示することによって、ゴーラクナート研究の初期における本文批評などの過程とその成果を知り得、上述のサンスクリット文献史研究とともに、本研究にとって大きな貢献をなすものと考えるからである。

ここで、原著者の素描をしておくことが適切と思う。バルトワール(1901-1944) は、バナーラス・ヒンドゥー大学文学研究科ヒンディー文学専攻課程で修士号を 1928 年に取得後、1930 年から 8 年間同大学で専任講師 (Lecturer)、ついで 1938-43 年、ラクナウー大学専任講師を務めた。この間に、かれは『ヒンディー詩のなかのニルグナの伝統』(*Nirguna School of Hindi Poetry*, Benares:Indian Book Shop,1936) というこの分野の画期的な業績を公刊した[2]。

「ニルグナ」(nirguṇa) とはふつう「無属性（の）」を意味するが、バルトワールの時代に創成期にあったヒンディー文学（文献）史研究においては、北インドの中世期に輩出した在俗の宗教家の語録に表された、至高なる真実在があらゆる属性を超越した存在であることを意味している。因みに「ニルグナ」の反意語である「サグナ」(saguṇa) は、「有属性（の）」の意味で、中世期のセンドゥー教の特徴である、至高の人格神への専一的な帰依（バクディ）思想のなかで、正統的なヒンドゥー教が説く最高神の化身思想や神話を認める宗教詩人の神観念を意味している。すなわち、この系統の観念では、最高実在はあらゆる属性をもち、ときには人間に近い感情をもった存在なのである。

そして、このような宗教的観念による中世期の文学史理解は、現在にまで至っており、バルトワールの業績は、その先駆をなしたことにあると言える[3]。

---

[2] 本書は、のちに *Traditons of Indian Mysticism Based upon Nirguna School of Hindi Poetry*, New Delhi: Heritage Publishers, 1978 として表題を変えて再版されている。

[3] ほぼ同時代的に、東インドのベンガル地方では、クシュティ・モーハン・セーンが同様な研究と業績を残している。クシュティ・モーハン・セーン著／中川正生訳『ヒンドゥー教』（講談社現代新書、1999 年）所収の、筆者による「解説」を参照。

# 『ゴーラク語録』：解説および本文の翻訳[4]

写本 a：パゥリー版

ガルワール地域のパゥリー街在住のパンディットであるターラーダット・ガェローラーがジャエプルから入手。四部から構成。第 1 部はダードゥー、カビール、ナームデーヴ、ライダースそしてハリダースの語録が収められている。第 2 部はナート派ヨーガ行者の作品を収めている。第 3 部にはダードゥー派のスンダルダース、ガリーブダース、ラッジャブダースら高弟たちの語録が収められている。第 4 部は、ラッジャブダースが、ゴーラクナートからトゥルスィーダースに至るまでのヨーガ行者、サードゥー、サントなど聖者たちの佳句を編纂したサルヴァーンギーからなる。この写本の最終ページとともに奥書が破損しているので、書写年代不明である。この写本がラッジャブダースのために書かれたか、あるいはラッジャブダースの時代に書かれた可能性がある。もしそうであるならば、書写年代はヴィクラマ暦 1715 年（西暦 1658 年）ころであるはずである。ヨーガ文献に筆者が初めて接したのは、この写本が最初のものである。以下の写本 i を除いた他のすべての写本についての解説は、筆者に写本が入手できた順番で行う。

写本 b

ジョードプル藩王国図書館所蔵。ジョードプルの考古局長ヴィシュヴァナート・レーウー博士がこの写本の写しを送って下さった。しかしながら、この写しにはゴーラクナートの作品のなかでサブディーしかなかった。規則に従って、当時はゴーラクナートの他の作品は入手できなかった。さらに、このサブディーの年代が不明である。

写本 c

この写本は、筆者はジョードプルのガジラージ・オージャー氏から入手した。この写本の冒頭には、カビールのサーキーがある。その直後に

[4] 原著の「解説」の訳文中の（ ）内は筆者の補注、『語録』の訳文中の（ ）は筆者の言い換え、〔 〕内は筆者による補足を表す。なお、『語録』の筆者注は、＊をつけて示した。

ナート派ヨーガ行者のサブディーが載っており、最後にハタヨーガのヒンディー語による作品が載っている。この写本でも、ゴーラクナートのサブディーのみで、他の作品はない。また書写年代も不明である。

写本 d

この写本は、筆者はジョードプル在住の詩人シュブカラン・チャーラン氏から入手した。この写本は、ニランジャニー派のある聖者が編纂した浩瀚な集成本である。この中には、ハリダースなどニランジャニー派の聖者とカビールなどニルグニー・サント（最高存在の無属性を強調する聖行者）の語録とともに、ナート派ヨーガ行者の語録も収められている。この本は、ヴィクラマ暦 1825 年に書かれた。

写本 e

パティヤーラー藩王国ナールニール所在のバーバー・ハリダース寺院所蔵で、ヴィクラマ暦 1714 年カールティク月白分第 8 日木曜日に書写された。これは、ニランジャニー派のガンガーラームがスワーミー・ループダースの読誦ために書写した。ナーガリープラチャーリニー・サバー（バナーラスにあるナーガリー文字によるヒンディー語の普及協会）のパンジャーブ研究の紀要に、この写本の写しが載っている。

写本 f

この写本は、ジャエプル藩王国の帝師ハリナーラーヤン師 (B.A.) 所蔵である。この写本は多くの集成を含んでいる。書写年代は、奥書によると次のようである。

> ヴィクラマ暦 1715 年、シャカ暦 1580 年、大吉祥なるパールグン月白分第 13 日の木曜日に、ディンドプル住のスワーミー・ピラーグダースの弟子スワーミー・マードーダース、そのヴリンダーヴァナ在住の弟子たちのために［書写された］。吉祥あれ。聖ラームが勝利する。

写本 g

この写本も、ハリナーラーヤン師所蔵である。これも、浩瀚な集成本である。ラッジャブダースのサーキーが終了した後、ナート派ヨーガ行者の語録が載っているが、その少し後に書写年代が次のように記されている。

> ヴィクラマ暦 1741 年ジェート月。ティティ第 8。第 5 日にスワーミー・サーイーンダースが書写した。

写本 h

この写本も、ハリナーラーヤン師所蔵であり、ヴィクラマ暦 1855 年に書写された。

写本 i

この写本の写しは、大変重要な原典をもとになされた。ハルドーイー県マードーガンジ郵便局アディンガープル・クティー村住のバーバー・ジュワーラーナート師所蔵と伝えられている。写しは入手できるのであるが、原本との校合のために、その住所に書簡を送ったら宛先不明で戻ってきてしまった。さらに、マードーガンジ郵便局の誰かが、その区域にはその名前の地はない、と書いてきた。この写しについて言及する必要性は、ゴーラクナートの名前でひろまっているいくつかの作品が、この写本のなかではセーワーダースが書いたものとされており、他の作品の写しを行っているものたちが、セーワーダースの作品と述べていることである。

写本 j

これらの他に、ナート派ヨーガ行者たちの作品の、あるサンスクリット語訳の手写本が、バナーラスのサラスヴァティー・バワン（現州立ヴァーラーナスィー・サンスクリット大学図書館）に所蔵されている。書写年代がなく、冒頭の部分もなくなっている。

これらの写本によって、現在までにゴーラクナートの名前で広まっている 40 の大小の作品が知られている。以下に、各作品とその所在する

写本の一覧表を掲げる。

| | f. | a. | g. | e. | d. | h. | j. | i. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1715 | ? | 1743 | 1794 | 1825 | 1855 | ? | 1794 |
| 1. sabadī | * | * | * | * | * | | * | |
| 2. pada | * | * | * | * | * | * | | |
| 3. siṣyādarasana | * | * | * | | * | | | |
| 4. prāṁṇa saṅkalī | * | * | * | | | | * | |
| 5. naravai bodha | * | * | * | | * | | * | |
| 6. ātmabodha (1) | * | * | | | * | | * | |
| 7. abahimātra joga | * | * | * | | * | | | |
| 8. pandraha tithi | * | * | * | * | * | | * | |
| 9. saptavāra | * | * | * | * | * | | * | |
| 10. machīndra gorakhabodha | * | * | * | | * | | | |
| 11. romāvalī | | * | * | | * | | * | |
| 12. gyānatilaka | | | | | * | * | * | |
| 13. gyānacautīsā | * | | * | * | | | * | |
| 14. pañcamātrā | | * | * | | * | | * | |
| 15. gorakha gaṇeśagoṣṭī | * | * | * | | * | * | * | * |
| 16. gorakha datta goṣṭhī (gyānadīpa bodha) | | * | | * | * | | | |
| 17. mahādeva gorakha guṣṭi | * | * | * | * | | | | * |
| 18. siṣṭa purāna | | | * | * | * | * | * | * |
| 19. dayā bodha | | | * | * | * | * | | * |
| 20. jātī bhauṁrāvalī (chanda gorakha) | | * | * | | * | | | |
| 21. navagraha | | | * | * | * | | | |
| 22. navarātra | | | * | | | | | * |
| 23. aṣṭa pārchyā | | | * | | * | | | |
| 24. raha rāsa | | | | | * | * | | |
| 25. gyāna mālā | | | | | * | * | | |
| 26. ātmabodha (2) | * | | | | * | | | |
| 27. vrata | | * | | | | * | | |

| | f. | a. | g. | e. | d. | h. | j. | i. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1715 | ? | 1743 | 1794 | 1825 | 1855 | ? | 1794 |
| 28. nirañjana purāṇa | | | | * | | | | |
| 29. gorakha vacana | | | * | | | | | |
| 30. indrī devatā | | | * | | | | | |
| 31. mūla garbhāvalī | | | * | | | | | |
| 32. khāṇī bāṇī | | | * | | | | | |
| 33. gorakha sata | | | | * | | | | |
| 34. aṣṭa mudrā | | | | | * | | | |
| 35. caubīsa sidhi | | | | | * | | | |
| 36. ṣaḍakṣarī | | | | | * | | | |
| 37. pañca agni | | | | | * | | | |
| 38. aṣṭa cakra | | | | | * | | | |
| 39. abali silūka | | * | | | | | | |
| 40. kāphira bodha | | * | | | | | | |

ヒンディー語の写本は、たいがい古いものはない。入手可能な写本はヴィクラマ暦 17 － 18 世紀以降のものである。磊落なジョーギーたちの語録の古い写本が得られなくとも驚きには値しない。なぜなら、彼らの語録は弟子や信者の口頭によって伝えられただろうからであある。所詮は語録なのである。上記のサーキーを見れば、どの２本の写本も同一の読みを提示していない。口頭伝承によるこれらの語録に関して、二つの事実が注目される。ひとつは、ナート派の導師たちの語録に対する弟子たちの深い信仰と信頼の情であり、それこそが、写本の散逸を防いでいるのである。もう一つは、記憶によっているために、写本に変更や欠落が生じ、また宗派の意図や教義の発展と展開、あるいは教義の明確化のために導師たちの名前を冠して新たなる作品が創られたり、旧い作品に増広や変更が加えられたりする。それ故、さまざまな出所の写本を校合すれば、原典に近づくことに役立つのである。

上記の一覧表のなかで、書写年代が判明している写本中、f が最古（ヴィクラマ暦 1715 年）である。それにはゴーラクの名前で 15 の作品がある。写本 e（ヴィクラマ暦 1794 年）だけが、それより少なく 13 作品

であるが、そのうち 7 作品が写本 f と同じであり、6 作品は写本 f にない。ほかのすべての写本は、これ以上の数の作品を収めている。写本 g は写本 f よりたった 25 年後に書写されたのであるが、その 25 作品のうち 12 作品は写本 f にない。写本 d が最も多くの 26 作品を収録しているが、そのなかで 16 作品が写本 f にはない。写本 f と最も多くの共通の読みをもつのは、写本 a（推定書写年代はヴィクラマ暦 1715 年）である。そのなかでも、8 作品が写本 f にない。このように、写本 f の 4 作品が写本 a に、3 作品が写本 g に、5 作品が写本 d に、6 作品が写本 e にあり、12 作品が写本 h になく、6 作品が写本 j にない。

写本 f が最古であるので、これを最も重要な写本と見なすことが適切と思われる。また、この写本と最も多くの共通の読みをもっている写本 a も同様である。それゆえ、筆者は、本書の底本としてこの写本を選択した。しかし、すべての読みを採択した訳ではない。他の写本の、最も多くの読みと共通する読みを採択した。

写本 j が重要であるのは、この写本をナート派の教学者が提示したものと思われることである。それゆえ、この写本には、宗派内で重要視されていたであろう語録が当然ながら収録されている。

gorakha gaṇeśagoṣṭī と mahādeva gorakha guṣṭi を筆者は本書に採用しなかった。これらの作品は写本 f にあり、他の写本が前者を、3 本の写本が後者を含んではいるのであるが。この理由は後述する。このように、上記の一覧表のうちはじめの 10 作品が主作品である。11 番から 14 番までの作品も、筆者は主作品に含めるべきと考えた。このなかで、gyānacautīsā が写本 f にあり、写本 g と写本 j にも含まれている。しかし、筆者は、本書刊行までそれらを見ることができなかった。しかしながら、それらが、すぐに研究者の目に届くことを期待している。romāvalī と pañcamātrā は写本 a にあり、写本 g, d, j にも含まれている。gyānatilaka は写本 a, f になく、上記の表の 3 本の写本にしかないが、筆者は主たる作品中に含めた。写本 j に収録されているので、宗派にとって重要なのは明らかである。この写本の言語は古いように思われる。内容的にも、この作品は重要と思われる。ラーマーナンドの名を冠した gyānatilaka は、この作品と同じ系統で著されたように思われる。また、ラーマーナンドに対してナート派の影響は大変大きかったことは事実である。ジョード

プル藩王図書館の写本でも、この作品はゴーラクナートが書いたと記されている。写本 d, j にこの作品が収録されているのは、もちろんである。

第 14 番から第 19 番までの作品は、写本 i によれば疑わしい。写本 i の siṣṭa purāna と dayā bodha は、ディードワーナー（現ラージャスターン州ナーガゥール県）住のニランジャニー派の修行者、セーワーダースの作品とされている。また、書写生が gorakha gaṇeśagoṣṭī, mahādeva gorakha guṣṭi そして nirañjana purāṇa をセーワーダースの著作と述べている。もっとも、写本の本文には、これらの 3 作品がセーワーダースの著作であることは明言されてはいないが。こうした状況で、筆者ははじめの 2 作品を本書に採用しなかった。先にも述べたように、本写本自体が、疑わしいからである。それゆえ、筆者はそれらを主作品として採用できないのであるが、完全に排除することもできない。そこで、筆者はそれらを、補遺（1）に収めた。gorakha guṣṭi と mahādeva gorakha guṣṭi は、この写本があるために排除できない。なぜなら本写本自体のなかにセーワーダースの著作であることを示す証拠がないからである。しかしながら、プラーナ聖典に登場する神話上の人物とゴーラクとの対論は、おおいに捏造であり得る。そこで、写本 i に収められていない gorakha datta goṣṭhī も他の 2 つの作品とともに補遺（1）に収めた。なぜならば、これらの作品はゴーラクの著作として、たいへん重要視されているからである。gorakha guṣṭi と mahādeva gorakha guṣṭi は、a, f, j の 3 写本に収められており、前者の作品はほかの 5 本の写本、後者の作品は 2 本の写本の読みと同じである。nirañjana purāṇa も本写本ではセーワーダース著とは述べられていないが、写本 e に収められており、プラーナ的形式の作品である。そこで、本書には採用しなかった。

jātī bhauṁrāvalī は、写本 a, d, g に収められているが、ゴーラクの称讃であるので、ゴーラクの著作ではあり得ない。

abali silūka と kāphira bodha は写本 a に収められており、前者はほかでカビールの作品とも言われているが、ゴーラクナートの作品ではなく、作品自体から分かるように明らかにラタンナート (Ratananātha) の作品である。また、それゆえ「ジョーゲーサリー語録」(Jogesarī Bānī) の第二部に収められているのである。mūla garbhāvalī と khāṇī bāṇī も写本 g にあり、nirañjana purāṇa のようにプラーナ的な作品であるので、

本書ではまったく採用しなかった。gorakha vacana は言語の点からして近代のものであり、写本 g にしかないので、本書では採用しなかった。gorakha sata はサンスクリット語の gorakṣa-śataka のヒンディー語訳であり、ゴーラクの作品ではない。他の作品の中で、ゴーラクとその思想に照明を与えると思われる作品は、本書の補遺（2）に収めた。

ゴーラクナートの名を冠して新たな作品が創作されたばかりでなく、古いさまざまな作品の中にも偈頌が付加されていった可能性がある。そこで、筆者は諸作品のなかの増広と欠損の箇所を脚注に示しておいた。しかし、ゴーラクナートの最も真正性のある作品と見なされている sabadī は、時代とともに偈頌の数を増大して来たので、この方法はとり得なかった。そこで筆者は、sabadī をすべて本書に採用し、異読すべてを脚注に記した。sabadī の 189 句が全写本で共通であるので、それらの真正性が高いものと考えられる。189 句のうち数篇が明らかに他者のものと思われるが、それらの句の前後の部分も他の作者の作品であるので、排除しなかった。その点については脚注に示しておいた。

sabadī はゴーラクナートの最も真正性のある作品と思われる。すべての写本にあるからである。しかし、sabadī は gorakha bodha ほど知られてはいない。初版本〈欠落あり〉を見る機会を得たが、まさに gorakha bodha であり、カーシー（バナーラス）のカーマイケル図書館に所蔵されている。それは、バナーラス市プラブ・パータク地区にあるシヴラーム・シャルマー書店が出版したものである。最良の版は、ラーハゥール（現パーキスターン内）市のモーハン・スィンフ博士が編纂し、英訳も付してある。他の作品の刊本は、筆者はこれまで見たことがない。

本書の編纂事業を、筆者はずいぶん前に開始した。いくつかの写本の情報はたいへん後になって得られた。例えば、写本 f, g の情報は、本書の編纂が終了してからだった。それらの写本を校合して分かったが、それらの読みで、他の写本にないような読みはなかった。筆者がもっとも利用した写本は、a, b, c, d である。最も良い読みを提供してくれたのは、写本 a であった。そこで、筆者は、それを底本とした。しかし、そのすべての読みを採用した訳ではない。他の写本にある読みで、この写本の読みよりも良いと思われる読みを採用した場合もある。写本の文字が明らかに正しくなく、その証拠が見つかった場合には、筆者は訂正を加え、

脚注に理由とともに示しておいた。すべての異読も脚注に示しておいた。このように、テクストを校訂するまえに一語一語を検討した。写本 b を除いて、他の写本は "kha" の文字がすべて "ṣa" の文字で表記されている。また写本 b でも、すべて "kha" で表記されている訳ではない。そこで、本書では "ṣa" 文字の表記を採用した。写本によっては candrabindu が付されている場合と、ない場合がある。単音節に candrabindu が付されている場合は、発音の便宜のために故意に付けられている。長音節に付いている場合は、anusvāra と理解するべきである。

これらの語録の作者であるゴーラクナートとは誰か、いつの時代か、こうした問題について、筆者は、自己の論集『ヒンディー語詩におけるヨーガの系譜』(*Hindī kāvya yogadhārā*) で論じている。ここでは、ナート派ではこの作者が有名なゴーラクナートと違うとは認められていない、と述べるだけで充分と思う。さらに、筆者は、ゴーラクナートはヴィクラマ暦の 11 世紀に存在した可能性が高いと考えている。われわれに入手できた作品が、その時代そのままのものであるとは言えない。しかし、それでも古さの証拠が存在しているので、これらの作品の源泉は 11 世紀にあると言うことができよう。

*gorakha-bānī*
ゴーラク・バーニー
sabadī
サブディー[5]

basatī na sunyaṁ sunyaṁ na basatī agama agocara aisā /
gagana sikhara mahiṁ bālaka bolāi tākā nāṁva dharahuge kaisā // 1 //
有でもなく空でもなく、空でもなく有でもなく、

[5] 原語 sabadī は Skt. śabda の派生語であり、至高なる真実在そのものである「内面の正師」がかたる「真実語」の意味である。拙著『インド中世民衆思想の研究』(ノンブル社、2006 年)、p. vii を参照。なお、原著にはすべての写本に共通する「サブディー」として 189 篇あるが、本稿は、時間と紙幅の関係から、最初の 41 篇までのテクストと和訳を示す。

近づき得ず知覚し得ないような、
虚空の頂点で少年が話す、その者の名を如何に付けようか。

adekhi dekhibā dekhi bicaribā adisiṭi rākhibā cīyā /
pātāla kī gaṅgā brahmaṇḍa caṛhāibā tahāṁ bimala bimala jala pīyā // 2 //
不可視なるものを見よ、見て考えよ、不可視なるものを心にとどめよ。
地界のガンガーを頭頂の孔に昇らせよ、
そこで〔修行者は〕無垢で清浄なる水を飲む。

ihāṁ hī āchai ihāṁ hī alopa ihāṁ hī racilai tīni triloka /
āchai saṅgai rahai jū vā tā kāraṇi ananta sidhā jogesara hūvā // 3 //
不壊なるものはここに居りここに消え、ここで三界ができた。
不壊なるものはともに居り、
それが故に無数の成就者がヨーガの自在者となる。

veda kateba na khāṁṇīṁ baṁṇīṁ saba ḍhaṅkī tali āṁṇīṁ /
gagani sikhara mahi sabada prakāsyā tahaṁ būjhai alakha bināṁṇīṁ // 4 //
ヴェーダ、キターブ、物語、言葉、
〔これら〕すべては〔不壊なるものを〕覆いの下に隠す。*
虚空の頂のなかに、ことばが顕れ、
そこに不可視なるものの智慧を理解せよ。

*「物語」と訳した原語のもとの形は khāni と注釈してあるが、文脈から類推して kahānī と考えられる。

alakha biṇāṁṇīṁ doi dīpaka racalai tīna bhavana ika jotī /
tāsa bicārata tribha ana sūjhai cuṇilyau māṁṇika motī // 5 //
不可視なるものの智慧は二つの灯火をともし、
三つの館（三界）に一条の光〔が充ちた〕。*
それを尋求すれば三界が分かり、ルビー、真珠を得る。

*「不可視なるものの智慧」と訳したが、「智慧」の原語は vijñānī の派

生語とも考えられるので、「不可視なる智者」の意味にもとれる。

vede na sāstre katebe na kuraṁṇe pustake na bañcyo jāī /
te pada jāṁṇāṁ biralā jogī aura dunī saba dhandhai lāī // 6 //
ヴェーダ、論書、キターブ、クラーン、〔プラーナ〕聖典には説かれ得ない。
その聖句を知っているのは希なるヨーガ行者、
　そして世間はみなを生業に導く。

hasibā khelibā rahibā raṅga kāṁma krodha na karibā saṅga /
hasibā khelibā gaībā gīta diḍha kari rākhi āpanāṁ cīta // 7 //
笑え、遊べ、楽しめ、〔しかし〕貪欲・瞋恚を伴うな。
笑え、遊べ、歌を歌え、〔しかし〕自己の心を堅固に保て。

hasibā khelibā dharibā dhyāṁna ahanisi kathibā brahma giyāṁna /
hasai khelai na karai mana bhaṅga te nihacala sadā nātha kai saṅga // 8 //
笑い遊べ、禅定を行え、日夜、ブラフマンの智慧を語れ。
笑い遊んでも心を散乱させず、かれらは必ず常にナートとともに〔おる〕。

mahaṁmada mahaṁmada na kari kājī mahaṁmada kā viṣama bicāraṁ /
mahaṁmada hāthi karada je hotī lohai ghaṛī na sāraṁ // 9 //
ムハンマド、ムハンマドと言うなカーズィー（法官）よ、
　ムハンマドの思想は甚深なり。
ムハンマドの手に剣があるが、それは鉄製でもなく鋼鉄製でもない。

sabadaiṁ mārī sabadaiṁ jilāī aisā mahaṁmada pīraṁ /
tākai bharami na bhūlau kājī so bala nahīṁ sarīraṁ // 10 //
ことばによって殺し、ことばによって生かす。
　ムハンマドはこのような導師。
その誤りに迷うなカーズィーよ、
　そのような力は〔おまえの〕体にはない。

nātha kahaṁtāṁ saba jaga nāthyā gorakha kahatāṁ goī /

kalamā kā gura mahammada hotā pahalaiṁ mūvā soī // 11 //
ナートと言いながら世間みな騙されて、
　ゴーラクと言いながら〔世間みな〕沈んだ。
カリマーの導師はムハンマドだったが、最初に死んだのは彼だった。

sāramasāraṁ gahara gambhīraṁ gagana uchaliyā nādaṁ /
mānika pāyā pheri luṁkāyā jhūṭhā bāda bibāda // 12 //
精髄の精髄で深長の深長な、ナーダが虚空で鳴った。
ルビーを獲て浮かれ回り、偽りの主張・反論に〔世間は沈んだ〕。

koī bādī koī bibādī jogī kauṁ bāda na karanāṁ /
aṭhasaṭhi tīratha samandi samāvaiṁ yūṁ jogī kauṁ gurumukhi jaranāṁ // 13 //
ある者が論者である者が反論者、ヨーガ行者は論議をすべからず。
68〔箇所〕の聖地（聖河）が海に合するように、
　ヨーガ行者は正師の御口に〔生涯を〕費やすべし。

utapati hindū jaraṇāṁ jogī akali pari musalamāṁnīṁ /
te rāha chīnhoṁ kājī mulāṁ brahmā bisn mahādeva māṁnīṁ // 14 //
生まれはヒンドゥー、老いてヨーガ行者、
　知恵においてはムサルマーンの導師。
その道を知れ、カーズィー、ムッラー（イスラーム教学者）よ、
　ブラフマー・ヴィシュヌ・マハーデーヴァ（シヴァ）神が認めた〔道を〕。

māṁnyāṁ sabada cukāyā danda nihacai rājā bharatharī paracai gopīcanda /
nihacai naravai bhae niradanda paraccai jogī pramānanda // 15 //
〔正師の〕ことばを認めて葛藤がなくなった。
　〔この〕堅信によってバルトリハリは王となり、
　　ゴーピーチャンダ王は覚知を得た。
堅信によって民の主は誤謬がなくなり、ヨーガ行者は至高の覚知を得た。

aha nisi mana lai unamana rahai gama ko chāṁṛi agama kī kahai /
chāṛāi āsā rahai nirāsa kahai brahmā hūṁ tākā dāsa // 16 //

昼夜、意を至高の境地に保てば、至れる所〔の話〕を止め、
　至れざる所〔の話〕をする。
期待を捨て執着しなければ、ブラフマー神はその者の奴僕と言う。

aradhai jātā uradhai dharai kāṁma dagadha je jogī karai /
tajai alyaṅgana kāṭai māyā tākā bisanu pakhālai pāyā // 17
下方に行くものを上方に捉え、愛欲をヨーガ行者が焼尽し、
抱擁を払いマーヤーを断てば、その者の足をヴィシュヌが洗浴す。

ajapā japai sunni mana dharai pāñcauṁ indrī nigraha karai /
brahma agani maiṁ homai kāyā tāsa mahādeva bandai pāyā // 18 //
命息念誦を誦し虚空（頭頂の孔）に意を専注せしめ、五官を統御し、
ブラフマンの聖火に身体を焼潅すれば、
　その者の足にマハーデーヴァが帰依す。

dhana jovana kī karai na āsa citta na rākhai kāṁmani pāsa /
nāda binda jākai ghaṭi jarai tākī sevā pārabatī karai // 19 //
富と若さを期することなく、心を艶女に向けず、
ナーダ・ビンドゥ（根源音の潜勢態）が身体に遍満していれば、
　その者にパールヴァティーが仕える。

bālai jobani je nara jatī kāla dukālāṁ te nara satī /
phurataiṁ bhojana alapa ahārī nātha kahai so kāyā hamārī // 20 //
幼児期・青年期でも感官制御し、吉・凶なる時にも動ぜず、
急いで食事をし小食であれば、ナートは言う、
　その身体は自己のものと。

sabadahiṁ tālā sabadahiṁ kuṁcī sabadahiṁ sabada jagāya /
sabadahiṁ sabada sūṁ paracā huā sabadahiṁ sabada samāyā // 21 //
ことばこそ鈎、ことばこそ鍵、ことばが、ことばを目覚めさせ、
ことばが、ことばを覚知し、ことばが、ことばのなかに収斂する。

pantha bina calibā agani bina jalibā anila tṛkhā jahaṭiyā /
sasambeda śrī gorakha kahiyā būjhilyau paṇḍita paṛhiyā // 22 //
道なく歩み、火なく燃え、風が渇きを消す。
「〔これらは〕経験によって知られる」、聖ゴーラク〔・ナート〕は語った、
「学問のあるパンディットよ、〔これを〕理解せよ」。

gagana maṁḍala maiṁ ūndhā kubā tahāṁ aṁmṛta kā bāsā /
sagurā hoi su bhari bhari pīvai nigurā jāi piyāsā // 23 //
虚空界に逆さまの井戸があり、そこに甘露が存す。
師をもつ者は〔それを〕いっぱい飲み、師なき者は渇く。

gagane na gopanta teje na sokhanta pavane na pelanta bāī /
yahī bhāre na bhājanta udake na ḍūbanta kahau tau ko patiyāī // 24 //
虚空は覆えず、火炎は乾かせず、風は揺らすことができず。
大地の重みは壊せず、水は沈められず、
〔このように私が〕言って誰が信じようか。

bāsa sahetī saba jaga bāsyā svāda sahetā mīṭhā /
sāca kahūṁ tau satagura mānaiṁ rūpa sahetā dīṭhā // 25 //
香気によって全世界が薫ぜられ、美味によって〔全世界が〕甘美なり。
真実を言えば正師は認める、〔それは〕形に顕れる。

marau ve jogī marau maraṇa hai mīṭhā /
tisa maraṇīṁ marau jisa maraṇīṁ gorakha mari dīṭhā // 26 //
死ね、ヨーガ行者よ、死ね、死は甘美なり。
その死を死ね、ゴーラク〔ナート〕が死んでみせた死を。

habaki na bolibā ṭhabaki na cālibā dhāribā pāvaṁ /
garaba na karibā sahajaiṁ rahibā bhaṇata gorakha rāvaṁ // 27 //
突然しゃべらず、音を立てて歩まず、足をゆっくり下ろすべし。
慢心せずに、自然(じねん)に住すべし、〔かく〕ゴーラク王は語りき。

bharyā te thīraṁ jhalajhalanti ādhā /
sidheṁ sidha milyā re avadhū bolyā aru ladhā // 28 //
満ちた者は動ぜず、生半可な者は忙しく動き回る。
スィッダにスィッダが会えば、遁世者よ、対話があり益多し。

nātha kahai tuma sunahu re avadhū diḍha kari rākhahu cīyā /
kāma krodha ahaṃkāra nibārau tau sabai disantara kīyā // 29 //
〔ゴーラク〕ナートは言う、おまえ聴け、遁世者よ、心を堅固にしておけ。
貪欲、瞋恚、我慢を捨てよ、そうして諸国巡歴をなせ。

svāmī bana khaṇḍi jāūṁ to khudhyā vyāpai nagrī jāūṁ ta māyā /
bhari bhari khāūṁ ta binda biyāpai kyoṁ sījhati jala byanda kī kāyā // 30 //
スワーミー（師）よ、森に行くと餓えが増し、
　街に行くとマーヤー（幻惑）〔が蠱惑する〕。
腹一杯食べるとビンドゥ（精液）が増す。
　水・滴（精液）でできた身体をどのように修練しようか。

dhāye na khāibā bhūkhe na maribā ahanisi lebā brahma agani kā bhevaṁ /
haṭha na karibā paḍyā na rahibā yūṁ bolyā gorakha devaṁ // 31 //
飛びついて食べてはならず、餓えで死んではならず、
　日夜ブラフマンの聖火を識るべし。
無理はせず、落ち込んでいてはならない。かくゴーラク天は語りき。

thoṛā bolai thoṛā khāi tisa ghaṭi pavanāṁ rahai samāi /
gagana maṇḍala meṁ anahada bajai pyaṇḍa paṛai to satagura lājai // 32 //
少し話し少し食す者の身体に、風〔大〕が収まっている。
〔その者は〕虚空界（頭頂）で奏でられざる音を聴く。
　〔それゆえ〕身体が崩れれば（死ねば）、正師は恥じ入る。

avadhū ahāra tauṛau nidrā moṛau kabahuṁ na hoigā rogī /
chaṭhai cha māsai kāyā palaṭibā jyūṁ ko ko biralā bijogī // 33 //
遁世者よ、食を減らし睡眠を抑えよ、

〔さすれば〕決して病者となることなし。
六月ごとに身体を若返らせよ、このように〔行じる〕ヨーガ行者は稀なり。

deva kalā te sañjama rahibā bhūta kalā ahāraṁ /
mana pavanā lai unamani dharibā te jogī tata sāraṁ // 34 //
天類の技によって統御し、生類の技によって摂食〔を統御すべし〕。
意を浄化し至高の境地にもたらし保持すれば、
　そのヨーガ行者は真実の精髄〔を得る〕。

avadhū nidrā kai ghari kāla jañjālaṁ ahāra kai ghari coraṁ /
maithuna kai ghari jurā garāsai aradha uradha lai joraṁ // 35 //
遁世者よ、睡眠の家に時間という揉め事〔が入り込み〕、
　摂食という家に盗人〔が入り込む〕。
交媾という家に老いが巣くう、
　下方に行くもの（精液）と上方に行くものを結びつけよ。

ati ahāra yandrī bala karai nāsai gyāṁna maithuna cita dharai /
byāpai nyandrā jhaṁpai kāla tāke hiradai sadā jañjāla // 36 //
過度の摂食によって感官は力をもって智慧を破壊し、交媾が心を捉える。
眠気が増して時間が覆う、その者の心にはつねに悩み事がある。

ghaṭi ghaṭi gorakha bāhī kyārī jo nipajai so hoi hamārī /
ghaṭi ghaṭi gorakha kahai kahāṁṇīṁ kācai bhāṁḍai rahe na pāṁṇīṁ // 37 //
〔生類の各々の〕身体ごとにゴーラク〔ナート〕は畑を耕した、
　とれたものは私のものと。
身体ごとにゴーラクは話（教説）をする、素焼きの壺には水は留まらない。

ghaṭi ghaṭi gorakha phirai nirūtā ko ghaṭa jāge ko ghaṭa sūtā /
ghaṭi ghaṭi gorakha ghaṭi ghaṭi mīṁna āpā paracai gura mukhi cīṁnha // 38 //
〔生類の各々の〕身体ごとにゴーラクは音なく巡回す、
　どの身体が起きているか、眠っているかと。
身体ごとにゴーラクがおり、身体ごとにマッツェーンドラがいる、

（46）

〔ゴーラクは〕導師〔マッツェーンドラ〕の口（教え）から
覚知を見極めた。

pāvaṛiyāṁ paga phisalai avadhū lohai chījanta kāyā /
nāgā mūnī dūdhādhārī etā joga na pāyā // 39 //
〔修行者用の〕下駄を履く者は道を踏み外す、遁世者よ、
鉄〔の鎖で縛っておけば〕は身体を弱める。
裸形の修行者、沈黙行の修行者、乳のみで生活する者は、
ヨーガ〔で至高の境地〕を得られない。

dūdhādhārī para ghari cita nāgā lakaṛī cāhai nita /
monīṁ karai myantra kī āsa bina gura gudaṛī nahīṁ besāsa // 40 //
乳のみで生活する者の心は他人の家に〔向き〕、
裸形の修行者は木材を毎日必要とする。
沈黙行の修行者は〔教えを話してくれる〕同伴者を期待し、
師のいない者はぼろの外套も期待できず。

dakhiṇī jogī raṅga caṅgā pūrabī jogī bādī /
pachamī jogī bālā bholā sidha jogī utarādhī // 41 //
南方のヨーガ行者は陽気であり、東方のヨーガ行者は議論好き。
西方のヨーガ行者は純朴で、成就したヨーガ行者は北方のひと。